P3-2 役割を重視した活動提供により主観的幸福度の向上が図れた一症例について ～生活行為向上マネジメントを活用して～

○佐平 安紀子（OT），武久 洋三（MD）
社会福祉法人関西中央福祉会 平成リハビリテーション専門学校

Key word：生活行為向上マネジメント，役割，通所リハビリテーション

【はじめに】今回，家人に対する罪悪感や自身の老いに否定的な感情が強い症例に対して，主観的幸福度や自尊心の回復を目的に生活行為向上マネジメント（以下，MTDLP）を活用した介入を行った．職歴を用いた活動提供や規範的統合を図るアプローチの実践により，生活に好循環を生む一助となったため以下に報告する．発表に際し本症例及び家人に説明し同意を得た．

【症例紹介】60歳代男性．定年まで造園業に従事．退職後，飲酒と臥床を繰り返す日が増加．X年全身倦怠感や食事摂取困難が目立ち，妻の付き添いにて近隣内科受診し肝障害の悪化，コルサコフ症候群の診断にて入院の運びとなった．X年+9月退院となり当院精神科へ紹介．X+1年当院通所リハビリテーション（以下，通所リハ）利用開始となった．現在は週4回通所リハを利用しながら妻と二人暮らしを継続．性格は神経質な面・不安を生じやすい面がある．

【作業療法評価】心身機能面では記憶障害・作話が，ADLでは整容に気を使わない等が問題点であった．IADL面では参加機会の減少，環境面では統合的規範が保たれていない現状や症例との外出に家人が消極的な面が課題となっていた．改定PGCモラールスケール（以下，PGC）は3/17点．症例は「家でもここでも上げ膳据え膳」，「言われた通りに暮らすしかない」，「ここは草花や木の整備が不十分」等の発言をよく口にしていた．役割提供による自尊心の回復に着目し，合意目標を①通所リハでやりがいのある活動を行う②下膳・食器洗いの手伝いを行うこととした．①の実行度3/10，満足度3/10，②は未実施であるため実行度・満足度共に1/10となった．

【経過】

第1期：あきらめの強い時期

提供した活動を拒否はしないが「何でも良い」との発言が多い．取り繕いや作話に対して職員間で対応にばらつきがあり，職員の対応に不満を述べることがあった．利用者との交流は乏しく職員との交流が中心であった．

第2期：あるべき姿と現実との乖離に向き合った時期

症例がその場で表出した内容に共感的に対応する，見守り中心の援助へと職員間の意識統一を図った．面談ではあるべき姿について話し合い，症例が繰り返し発するキーワードの抽出を行った．

第3期：乖離の減少に向けて取り組んだ時期

卓上作業を中止し，造園作業や下膳・食器洗いの活動を導入した．他者より賞賛される機会が多く交流の機会が増加した．髭剃りを自発的に行う等，整容への意識向上が見られた．

第4期：自宅での役割獲得を目指した時期

自宅での役割活動の重要性をカンファレンスを通じて家人に説明し，理解を得た．妻と園芸用品を買いに行く，草むしりや食後の片づけを率先して行う等，自宅でも役割活動を遂行することが可能となった．

【結果】PGC：9/17点．合意目標①の実行度6/10，満足度8/10，②の実行度8/10，満足度8/10となり，活動参加機会の向上により主観的幸福感の向上が図れた．

【考察】Lawton（1975）は幸福な老いの要因として①基本的な満足感 ②自分の居場所 ③事実としての老いの受容を挙げている．仕事一筋で生活してきた症例にとって退職による喪失体験は大きいものであった．職歴を交えた活動により役割の復権が図れ主観的幸福度の向上，実行度や満足度の向上に繋がったと考えられる．他者の為に役立ち，必要とされる感覚は自信と心地よい居場所へと繋がり，あるべき姿と現状の乖離を軽減させる要因となった．役割のある生活は日々の生活を好循環へと導く非常に大きな要因でありMTDLPを活用することで連続した生活を共有しイメージしやすいマネジメントが行えた．今後も社会や人との繋がりを重視した介入を強化できるよう，積極的なMTDLP活用を図っていきたい．